

# イネ縞葉枯病に注意しましょう

近年発生が非常に少なかった縞葉枯病が県南部のコシヒカリで増加しています。縞葉枯病ウイルスを媒介するヒメトビウンカの保毒虫率も高まっており、発生の拡大が懸念されますので、適切な防除を実施しましょう。

## 縞葉枯病の発生と病徴

- 病原ウイルスはヒメトビウンカ（写真1）で媒介され、経卵伝染します。
- 畦畔等の雑草地や麦畑で越冬したヒメトビウンカが田植後の本田に移動し、吸汁することで感染が始まります。
- 分けつ最盛期までは稲の感受性が高く、感染株は枯死します。幼穂形成期以降に感染した株では、穂の出すくみや不稔等がみられ、減収となります。

表1 縞葉枯病の感染時期、発病時期、病徴

	感染期間	発病時期	病徴
前期発病	分けつ初期	分けつ最盛期	ゆうれい症状（写真2）
	分けつ最盛期頃	穂ばらみ期	黄緑～黄白色の縞状斑紋、黄化
後期発病	分けつ末期（幼穂形成期）以降	出穂期以降	穂の出すくみ、奇形、不稔、葉しょう褐変（写真3）
再生稲	作付全期間	—	再生稲の黄化、徒長（写真4）

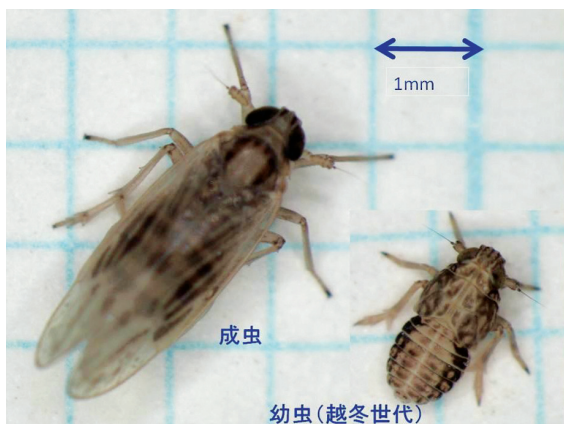


写真1 ヒメトビウンカ



写真2 ゆうれい症状



写真3 穂の出すくみ等



写真4 再生稲（ヒコバエ）の黄化

# 防除対策

## [1] 抵抗性品種「あさひの夢」の作付割合を増やす。

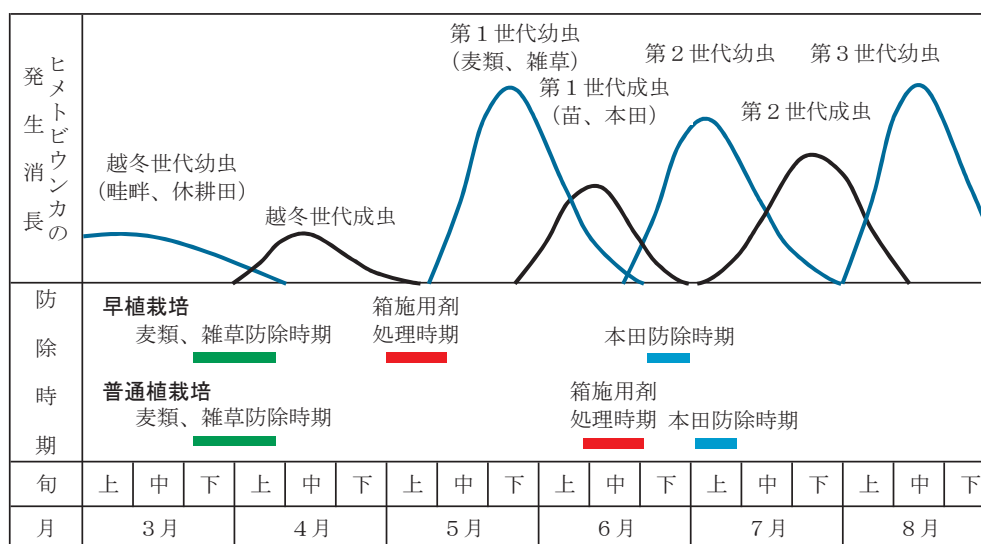
○抵抗性品種「あさひの夢」の作付割合を地域全体で増やすと、縞葉枯病が減少します。

## [2] ヒメトビウンカの防除を徹底する。

○再生稲（ヒコバエ）、畦畔等の雑草はヒメトビウンカの生息地となるため、刈取後はすみやかに耕起し、ほ場周辺の除草を徹底する。

○前年に縞葉枯病の発生が多かった地域では、アドマイヤー箱粒剤、ダントツ箱粒剤、またはこれらの成分を含む混合箱施用剤を使用する。

○第1世代幼虫の保毒虫率の高い地域では、早植で6月下旬、普通植で7月上旬に本田防除を行う。



(図) 栃木県におけるヒメトビウンカの発生消長モード図と防除時期（平年）

表2 ウンカ類に登録のある主な農薬

農薬名	希釈倍率又は使用量	使用時期／使用回数
＜箱施用剤＞		
ダントツ箱粒剤	育苗箱1箱当り50g	移植3日前～移植当日／1回
アドマイヤー箱粒剤	育苗箱1箱当り50～80g	移植2日前～移植当日／1回
＜本田防除剤＞		
アルバリン粒剤（蚕）	3kg／10a	収穫7日前まで／3回以内
スタークル粒剤（蚕）	3kg／10a	収穫7日前まで／3回以内
ダントツ粒剤（蚕）	3kg／10a	収穫7日前まで／3回以内
スタークル液剤10（蚕）	1000倍	収穫7日前まで／3回以内
スタークルメイト液剤10（蚕）	1000倍	収穫7日前まで／3回以内
ダントツ水溶剤（蚕）	4000倍	収穫7日前まで／3回以内

注1) 育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）  
 注2) （蚕）は蚕に対する毒性が長期間にわたる薬剤。  
 注3) 登録内容は平成21年2月6日現在のものです。

● 本資料に関する問い合わせ先：栃木県農業環境指導センター ●

TEL 028-626-3086 FAX 028-626-3012